

## 結業證書

粕屋郡須恵町 石滝 慶子

中国のコロ島から私たちが乗りこんだ米軍上陸用舟艇が佐世保の港についた。昭和21年5月半ばのことだった。

船の後尾があげられた。潮の香と共に、5月の若葉の匂いがさっと私の胸にせまってきた。『ああ、とうとうたどりついたのだ。夢にまでみた日本に』。それは懐かしい匂いだった。8年ぶりにみる若葉のそよぎと匂いだった。それにもまして不思議だったのは、港の近くを歩いている女の人が御太鼓をしめていることだった。それはモンペばかりはいていた私にとっては不思議な眺めだった。「ねえー、御太鼓をしめているよ」。私は友人に話しながら、その赤い帯をみつめていた。『ああー、私には帯の1本もないのだ。リュックサックの中味はセーターにモンペばかり』。

だが、さらにびっくりしたのは、列車が佐世保から博多駅についてみた光景だった。駅から海がまるみえなのだ。私の思い出の中の博多の町は、米軍の空爆で瓦礫の町となっていた。『夢でもみているのかしら?』。いくら目をこすってみても、瓦礫の向うにキラキラと海が光っていた。

旧満州（現在、中国東北地方）錦州市の官舎の近くには守備隊があり、私たちは安全と信じていた。ところが昭和20年8月8日、ソ連軍が突然宣戦を布告、満州に進入してきたのだ。その時、関東軍がさっと民間人をおいてきぼりにして逃亡してしまったのだ。

夫を兵隊にとられた女、子供、私たちはどうしようもなかった。信ずる者から裏切られ、突然、異民族の中にほうりだされたのである。女たちはあっちに集まり、こっちに集まってはうろろするばかりだった。まだ敗戦の実感がわかなかつたのだ。

ところが、終戦と同時に城内からはじまった中国人の暴動は、町から遠く住んでいた私たちの町にも押しよせ、無一文となってしまった。私は官舎の一番後列に住んでいたが、道路を挟んで住んでいた孫家の娘、陽明（中学3年）と仲良くし、よく私は彼女にいろんな物をあたえていたので、暴徒と化した民衆がおしよせてくると門の外から見張っていた彼女は走ってきて、「我的朋友、朋友」と言って、彼等を家に入れさせなかった。私は彼女のおかげで大変助かったのだ。人にはよくしておくものだというをつくづく感じた。

引揚げは住んでいた錦州市で第一船であった。理由は、通化の奥で兵隊であった夫たちがはるばる南下。せつかく私たちの下に帰ってきたのに、ソ連、八路、国府軍とつぎつぎ入城してきた兵に追いまわされたからだ。日本は満州事変から14年にわたる戦争をしかけ、各国を蹂躪してきたのだからそれはあたり前であったかもしれない。

最後は国府軍から兵隊であった者はひとり残らず近くにあった南満州鉄道の合成燃料に集結させられた。私は合成燃料への坂を布団をかついで登っていく夫の姿に、『これが最後の別れ

か？ いずれ華北にでも送られ、重労働でもさせられるのであろう』と涙のにじんだ目で、坂を登る背の高い夫の姿をみつめていた。

ところが、中華民国の蒋介石総統は『以德報恩』、徳をもってうらみに報いると全世界に発表されたそうである。夫たちは集められた合成燃料で、1週間くらい孫文の三民主義の再教育を受け、やっと帰ることができたのである。三民主義とは孫文が構想をねり、孫文が残した最大の収穫であったと言われている。

再教育最後の日、奥さんたちも集合せよと言われ、これがいよいよ夫との最後の別れかと決心してでかけた。ところが案に相違して、兵隊たちの演芸会をみせられた。有名な、貫一、お宮もあった。兵隊たちは何回も練習したのだろう。あまりのうまさに私たちは笑いころげた。演芸がおわると、日本の大学をでたと言う日本語のうまい将校が壇上にたち、「あす、この兵隊たちを帰す」と約束された。まるで夢のようだった。私は合成燃料の坂をころげるようにして帰り、家々のドアを叩き、「あすは帰れるのよ」と言って回っても、みんなは「ほんとう」と信じられないような顔をしていた。

翌日、夫はまさに一枚の結業証書と共に帰ってきた。中には「こんなもの」と破りすてる人もあったが、私は破らなかった。いつか問題がおきればこれが役に立つと、くるくるとまき持ち帰った。帰国後、たびたびの転任にも持ち歩き、今は額の中におさまっている。長い年月に黒ずみ、しみてはいるが文字は鮮明である。

敗戦からの10ヶ月間は、毎日ござをくるくると巻き、家に残っていた鍋、茶わんの1つでもござの上にならべて道路で売っていた。その道路は、日本人、中国人がいりみだれて市場となってしまった。中国人は日本人から略奪した着物、赤い長襦袢を腕にかけ、「安いよ、安いよ」と声をからし、まるで日本語と中国語のかけあい漫才のようだった。

ある日のことだった。ござの上にならべて2人で店番をしていたのに、人々のむれの中から手が伸び、夫の腕時計がするすると動いていく。だまっておればよかったのに、「あっ、とられる」私が叫んだからたまらない。まわりの4、5人の中国人が夫をひきずりだし、わっとなぐりかかった。まるで袋叩きだった。殺されると思ったが私は「誰か、助けて、助けて」と叫び回ったが、日本人の男たちはだれひとり助けてくれなかった。そうだろう、祖国に帰る迄と妻子のために頑張っている大切な身体である。人のことにかかわり、けがでもしたら大変だ。その時、誰か叫んだ。一瞬のことで何と叫んだのかわからなかったが、今迄夫をとりかこみ、なぐっていた彼らは人ごみの中にかくれてしまった。あい色の中国服、白髪、テン足、黄色い歯もまばらなお婆さんが私を見て笑っていた。やっとわかった。このお婆さんが助けてくれたのだ。私はお婆さんの前にひざまずき、「謝々」と言うのみだった。

あのお婆さんは誰だったのだろう。どう考えても天から舞いおりて私たちを助けてくれた。うす汚れているが、私たちにとっては神様のような気がしてならなかったのである。その日はうれしさのあまり、中国人が一輪車に乗せて売っている切●(栗餅)を大きく切ってもらい、食べ食べ帰った。それは悲しくも、日本人としての誇りもはじらいもすっかり忘れてしまった

人間になっていたのである。

結業証書

